

フロイトの家を訪ね、保育のことを考える

津守 真

フロイトの没後、ちょうど五十年目にあたる一九八八年九月二十三日、私は、ウィーン九区ベルクガッセ十九番のフロイトの家で一日を過ごした。死の前年まで彼が四十七年間にわたって住み、また臨床の仕事をした家である。

フロイトの臨床は大人を相手にし、小さな室内でソファに横になつた患者と対話を交わすものであった。その点では子どもと一緒に身体を使って動く保育とは性質がちがう。けれども、彼が医師の権威をすて、患者との誠実な人間関係に入ることをその臨床の前提としたことは保育に共通である。そのときには自分ありのままをそこに表現するようになり、それを思索の対象とした点も保育と共通である。保育の日日においては、フロイトに比べればとるに足りないささやかな発見と思索であるが、保育者自身が自分なりに考えてゆくことを彼の著作は励ましてくれる。フロイトの理論そのものよりも、彼が臨床に

向かう態度に私はひかれる。

たとえば、フロイトが次のようにいうとき、患者を子どもに、分析する医者を保育者に置きかえるならば、ほとんど保育のことをしているようにすら思えてくる。

「その場合、分析をする医者は注意を万遍なく漂わせながら、自分自身を自己の無意識的精神活動に任せ、熟考と意識的期待形成を可能な限り避け、患者から聞いたことについては何も特別に記憶の中に定着させないようにし、そのようにして患者の無意識を自分自身の無意識で捉えるようにするのが、最も目的に適った態度であるということが、やがて経験から明らかになつた。そうすると、事情がよほど不都合過ぎるのでなければ、患者の思いつきがいわばほのめかしのように、ある特定のテーマの方へ手探りしながら近づいていることがわかつた。」（フロイト「精神分析とリビドー理論」著作集11P.78）

保育者も、子どものある部分にこだわって見ていたり、こんな風にさせたいと強い期待をもつて向かうと、子どものありのままの姿が見えなくなつてしまふ。子どもが無心になって遊ぶ、そのときの子どもの心に寄り添つて、こちらも無心になるときに、子どもは心の奥底の本心を表現してくれる。そうするのには、保育者は、子どもの活動の全体に、その周囲をも含めて、注意を万遍なく漂わせて、子どもとの関係をつくり上げてゆくことを要する。

その際の治療（ここでは保育）の目標として、フロイトは次のようにいう。

「治療の目標として次のようなことを掲げることができる……つまり、彼の自我の最

も広範な統一化と強化をもたらし、内的葛藤のための心的浪費を病人がしないですむようにし、病人の素質と能力から見て、彼がなりうる最良のものに彼を発展させ、そのようにしてできる限り彼を実行力のある、楽しむことのできる人間にすることである。」（同P.91）このことは保育の目標にもあてはまると思う。子どもが自分で選択し、自分で判断し、できない範囲のことは他の人に助力を求める、未来の困難にも自分で向かってゆける自我を育てる、つまり、それぞれに応じて、「彼がなりうる最良のものに彼を発展させる」ことである。そうなったときには、人は生きることを楽しめるようになる。

つづけてフロイトは次のことを補足する。「病気の症状の解消は、……いわばおまけとしてこうしたことが生じるのである。分析家といふものは、患者の個性を尊重し、彼—医者—の個人的な理想像に合わせて患者を改造しようなどという努力はしない。……分析を受ける者の主導性を目覚めさせることができれば、それが嬉しいのである。」（同P.91）

こんな困った行動がなくなつたということは、相手との関係をつくり上げることによって、相手の自我が育てられたことに伴うおまけだというのである。困った行動をなくさせようとするのが治療の目標ではないという。まして、大人の理想像に合わせて子どもをつくりかえることではない。保育においては、あらわれたことだけにとらわれて近視眼的にそれに対処する手段を考えていたのでは、根本を見失つてしまふ。フロイトはそうなりがちな私を立ち止ませ、もう一度人間を見直させてくれる。

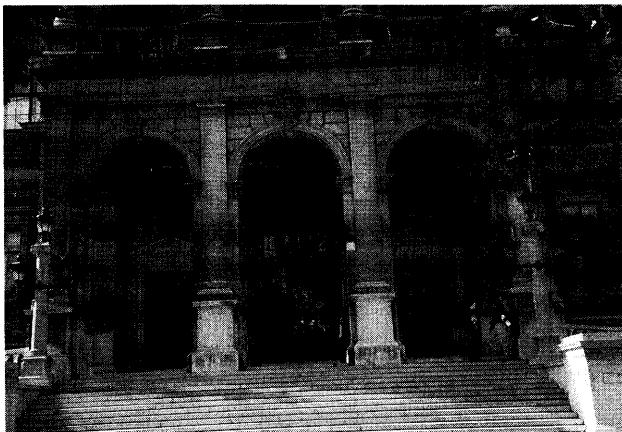
フロイトがこうしたことを考えつて臨床を行っていた広くもない部屋と、それにつづく質素な書斎で、たくさんの展示と説明書をみながら、ときどき書斎の窓から内庭を眺め、私は落ち着いた一日を過ごした。没後五十年の記念の日というのに、三十分間ほど高校生らしい十数人の一団が先生に引率されて來た以外は、数名の見学者があるだけだった。閉館の三時になり玄関の扉を出ると、すぐ向かい側にもうひとつ扉があることに気付いた。

フロイトの住宅の玄関である。把手をまわして、そのまま鍵をかかっていった。

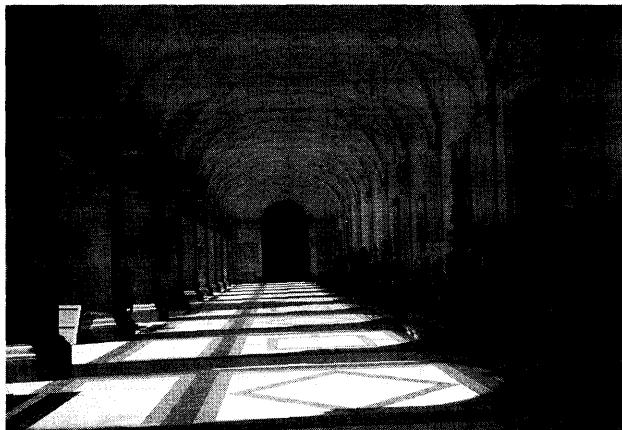
翌日、私はウィーン大学を訪れた。リンク

(環状道路)の曲り角に裝飾建築の市庁舎に接して、大学とは見えない美術的な建物である。中庭を囲んで回廊が続き、中世以来、大學に貢献した教授達の胸像が並んでいる。そのいかめしい表情の像をひとつひとつ数十も見て歩くうちに、何と、ジグムント・フロイトの胸像があった。ユダヤ人であるために、また學問的正統性を欠く彼の理論の故に、正教授に任命されることを望みながら果たさなかつたフロイトが、いま大学の功労者たちの

▼ウィーン大学



▼ウィーン大学回廊 この最右端にフロイトの胸像がある



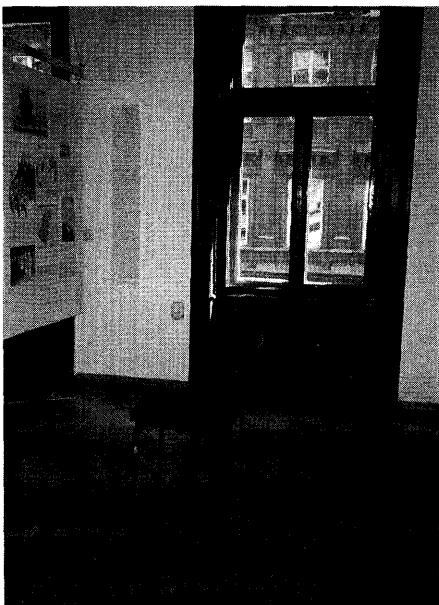
胸像群の中に加えられている。後に知ったところによると、この像は一九五五年二月四日にここに加えられたとのことである。白亜の石の殿堂の中にこの像を見るのは、彼の長年住んだ粗末な家を訪れた後には不釣合な気もした。中庭の線でみながらベンチに腰かけて人の気配もない土曜日のひと時を過ごした。

　　ウィーン大学からフロイトの家まで歩いて十五分程である。前日には見られなかつた住居の部分を見せてもらつた。居間と寝室と子ども部屋は内庭に面しており、食堂はベルクガッセ通りに窓がある。彼は臨床の合間にはここに戻り、家族と団欒し、夕食のときにだれかが欠けていると黙つてフォークで指してたずねたといつその部屋々々には、いまぎつしりと記録と説明書が展示されている。この住宅の部分の展示は、すべて一九三〇年代の新聞や雑誌の切抜き、写真、当時の社会情勢を告げる記録である。この時代の反ユダヤ主義、ヒットラーの脅威、ユダヤ人の強制収容所の不安、いまや体系をなしていた精神分析への疑惑や圧迫、これらに直面したのがフロイトの晩年だったことを、この家の展示は強

調しようとしている。「ある日突然、法律の保護の外に投げ出された」ことを発見したときには人がさらされる状況をこれらの資料は語っている。それに加えて、下頸部の癌がフロイトの晩年を絶えず悩ませた。このような生活の中でも彼の自我は弱ることがなかつた。そのころの次のような手紙の一節が展示されていた。「私の年齢になると、生きることは容易でありません。だが春は美しい。同様に愛もまた。」(一九三六年五月二十四日、愛す



▲ フロイト家居間



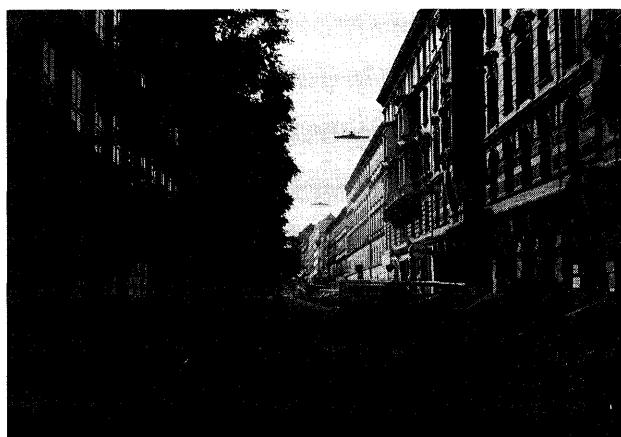
▼ 食堂

るH・D・()

彼がこの家を去つてロンドンに亡命することになった一九三八年の記録は、ほとんど日を追つて展示されている。ウィーンを去つてパリに逃れた汽車の時刻表まで保存されていた。

フロイトの家の街路側に窓のある一室は「ミナおばさん」の部屋である。早く未亡人となつた、フロイトの実妹である「ミナおばさん」は、ほとんど生涯をフロイト家と共にした。五人の子どもと共に大家族をきりもりしたフロイト夫人のことを私は考えた。

夜になるとウィーンの繁華街には、アコーディオンやバイオリンを弾く人々があらわれる。現代のロック風のもあるが、私共に懐かしいボビュラーラーな古典曲をアコーディオンで鳴らす年輩の音楽家たちもある。私はどうしてもその前で立ち止まってしまう。フロイトが好まなかつた社交界のコンサートとは違う、このような街角の演奏家は、十九世紀末から二十世紀初めのウィーンにはあつたのだろうか。翌朝、私は、フロイトの家から遠くないフランス・ヨゼフ駅から汽車でプラハに向かつた。



▲ベルクガッセ通り

一週間の会議を終えて日本に帰るとすぐに、私は留守中のK男のはなしを聞いた。K男はこここのところずっと私の弁当の包みをかばんから持ってきて食べていたが、私が不在の間、校長室の私の机の上においてあつたフロイト選集を二冊かかえて歩き、昼になるとそれをテーブルの上において自分の弁当を食べていたという。自転車にのせてもらうときも、荷台とサドルの間にそのフロイトの本をはさんでいたのだと若い保育者が報告してくれた。私がフロイトの家を訪ねていたときのことなので面白く思った。何も神秘的なはなしではない。毎週一度の大学の講義に使うので私の机の上に重ねてあつた本を、私の弁当の包みの代りに持つて歩いたのである。

二年程前、K男が幼児のころに、理解しにくい行為がつづいたときがあつて、そのときに私は、フロイトがゲーテについて書いた『詩と眞実』中の幼年時代の一記憶』（フロイト著作集3、P.318）と照らし合わせて考えたことがある。

そのころ、K男は手あたり次第に物を見えないところに投げこんだ。ラジエーターと壁との間のすきま、戸棚のうしろなどに、遊んでいた汽車やレール、いじっていた粘土、好きな絵本などを入れてしまい、それがひどい日には、無心になつて一緒についていようとしてもどうしてこんなにまでするのかと腹立たしく感じられたときもあつた。そんなある日、滑り台を一緒に滑ろうとしたとき、歩きはじめて間もないK男の妹が歩いているのが滑り台の上からみえた。チラと一瞬K男はこれを見たと私は思うのだが、K男は妹を見るのを避けるかのようにして屋内にもどつた。そのとき、私はあのフロイトの著作を思い出

した。

ゲーテが幼いときのある日、父親が陶器市で皿や壺をたくさん買つてきた。ゲーテはそれを窓から往来に投げて次々に割つた。向かいの家のいたずら小僧がもつとやれとはやしめたてた。ゲーテは台所の皿までも窓から投げ出して割つてしまつた。ゲーテにはそのとき赤ん坊の妹があつたことを、詳細に考証した後、フロイトは、西洋の子どもたちが信じているように赤ん坊はこうのとりが窓から持つてきたとするならば、邪魔な赤ん坊はまた窓から投げ捨ててしまえという気持ちが子どもの奥に動いていたのではないかと解釈してみせる。K男が物を見えないところに投げこんでしまうのも、妹を見ないですむように片付けてしまいたいという心の表現ではないかと私は気付いた。それまでK男は妹をいじめたこともなくあまりに紳士的なので、私はむしろ感心していたのだが、このことに気付いてみると想いあたることがいくつもあった。この解釈の正当さには別の議論があるにしても、このように考えてみると、それまでに腹立たしくさえ見えたK男の行為が、いとしく思えるようになつた。そうなつたときにK男を見る私の目は優しくなつたのだと思う。K男と私との関係は質が変わつてきた。

久しぶりに私に会つたK男は、はにかみながら私に近づいてきた。その日一日私はK男と過ごした。弁当の包みを私のかばんから出したK男は、机の上のフロイト選集には手をふれずに私と一緒に保育室に出ていった。